

## 東日本大震災 | 連続ルポ2 | 仮すまいの姿

Great East Japan Earthquake | Serial Report 2 | Life in Temporary Housing — no.4

## 避難所になった公共ホール

A Public Hall Converted into a Shelter

## 新田満

Mitsuru Nitta

(株)アクト・ディヴァイス ホールアドバイザー、NPO法人芸術工房理事長 / 1948年生まれ。2008年3月岩手県西和賀町役場退職。

1993年に開館した演劇専用の公立文化施設「銀河ホール」に退職するまで15年間勤務

本稿は岩手県大船渡市民文化会館・リアスホールの職員と市から委託を受けた弊社(株)アクト・ディヴァイスの派遣常駐技術者からの協力のもと、私がまとめたものです。当時の緊迫した状況を時系列に紹介します。

## 地震発生から1週間の避難所生活

## ● 3月11日(地震発生当日)

〈14:46〉地震発生。揺れが大きくなり始めた直後に停電。舞台上いた作業員は楽屋口から外へ避難。利用者は揺れが収まってから順次屋外へ避難誘導する。職員は館内の安全確認へ。

〈14:51〉楽器庫のシャッターが停電で開かず、調律師が中に閉じ込められているのを確認。ケガはない模様。天井の点検口から侵入を試みるも壁に阻まれ断念。シャッターを手動で操作する機構はすべて楽器庫内にあり救出困難と判断。消防にレスキュー要請。

〈15:10〉レスキュー隊到着。

〈15:30〉シャッター部分をジャッキアップして開口部を

確保。救出完了。このころ警察からホールを避難所にするかとの要請あり。

〈15:40〉職員が屋上から津波を確認。電話局や通信施設が被災して電話、携帯、インターネット等すべての通信手段が途絶。

〈15:50〉近くの工場の従業員ら100～200人がホール駐車場に続々と避難してくる。館内の非常灯がバッテリー切れのため全館消灯。自家発電はスプリンクラー専用のため、照明用の電源はこの時点ですべて喪失。

〈16:00〉館内を避難所にするための準備開始。上敷、スタイロ畳、地絨、ブルーシート等のホール備品をすべて供出し、ホワイエ、マルチスペース、アトリエ等に敷く。大ホール内は落下物の危険があるため閉鎖。

〈16:40〉受け入れ準備完了。これと前後して被災者が館内に入り始める(ピーク時で約470人)。

〈17:00～〉市の防災行政無線移動機を事務室に設置。本庁舎との通信手段確保。携帯ラジオで情報収集。食料、発電機、ストーブ、災害用仮設トイレの手配。断水、停電で水が流れないため館内トイレの使用は小用に限り許可。一部のトイレ内に乾電池式のLEDセンサーライト設置。エントランスに安否情報を書き込むメモ用紙と掲示板(展示パネル)設置。入口の自動ドアが作動しないため手動で開閉する要員を設置。救援物資でロウソクが届く。皿や空き缶で簡易ロウソク立てを作成し階段等足元の悪い場所に設置。避難所にテレビ局が無断で入る。避難者が憔悴しているため館長判断で取材を断る。炊き出しのおにぎり到着。近隣住民から布団、毛布数十枚の提供あり。

〈22:30〉災害用仮設トイレ設置完了。歩道上に設置したものはペグが打てないため、大ホールの鎮とロープで固定。

## ● 3月12日(2日目)

〈01:30〉発電機設置完了。各避難場所にストーブ設置。電気を必要としない反射型石油ストーブも設置。

〈早朝～夕方〉避難者名簿作成のため聞き取り調査。エントランスに受付設置。発電機用の軽油買い出し。この



図1 | 高台に建てられたため津波被害を免れ、避難所になったリアスホール



図2 | 避難所生活(大ホール・ホワイエ)

間、炊き出しのおにぎり届く。行方不明者の安否確認のため市民がひっきりなしに出入りする。

〈18:00〉テレビを発電機につないでみるも映らず。同軸ケーブルを加工して簡易アンテナを作成したところNHK教育テレビのみ映る。このとき初めて映像で被害状況を知る。

● 3月13日(3日目)

〈08:10〉DMAT(災害派遣医療チーム)到着。

〈10:30〉電気保安協会の点検が入る。受電設備に異常ナシ。本日中に停電復旧の見込みとの情報あり。



図3 | 避難所生活(マルチスペース)



図4 | 慰問コンサート(ホール内)



図5 | 感染症予防のため手洗いを徹底



図6 | 情報掲示板

〈13:00〉おにぎり等配給。

〈17:10〉停電復旧。断水は続いているものの貯水タンクにわずかながら水が残っており、トイレのセンサーが反応して水が流れ始める。節水のためセンサーのブレーカーを遮断。タンクのバルブも閉鎖。停電復旧と同時に大ホールの排風機が回りホール周りの扉に相当の圧力がかかる。手動で排風機停止。地震で脱落、宙づり状態になっている大ホール客電のブレーカーを遮断。

● 3月14日(4日目)

避難場所にテレビ設置。トイレ清掃のため一時的に貯水タンクのバルブ解放(これ以降、1日1回トイレ清掃)。県立病院に避難していた数十人がリアスホールへ移動。

● 3月15日(5日目)

節電のため館内照明の電球を一部間引き。貯水タンクへ給水。給水車からポリ容器へ移し、さらにそれを貯水タンクの上に運び流し込む。auの携帯電話が移動基地局により復旧。少しずつ外部との連絡が取れるようになる。

● 3月16日(6日目)

正面玄関入口外に仮設の給水タンク(蛇口付)設置。設置台として3×6の平台を6枚置き、ブルーシートを被せたものを使用。NTTドコモより衛星電話を提供され正面入口外に設置。前日に引き続き貯水タンクへ給水作業。

● 3月17日(7日目)

スタジオ、練習室をDMATの医療スペースにするため楽器類を移動。地絨回収および避難場所の床掃除。この日から避難場所の土足禁止(感染症予防)。空調設備の燃料タンクにロータリーから灯油給油。前日に引き続き貯水タンクへ給水作業。

### 公共ホールを避難所として活用

8月18日、幸い避難者全員が仮設住宅などに移り、リアスホールは避難所としての役割を終えた。上記の時系列記録のなかには多くの教訓にしなければならない事項が含まれている。今後想定されている地震災害の緊急避難場所として考えた場合、一定規模以上の敷地面積と快適に憩える空間を有し、かつ災害に強い公共文化施設は、効果的に活用されるべきであると思う。

地震調査委員会は平成22年1月1日現在の「次の宮城県沖地震の発生確率」として、10年以内にマグニチュード8.0前後を予想していた。このような危機感のなかで避難所指定の有無にかかわらず避難所としての受け入れ対策を講じていなかったのは悔いが残る。市民に安全、安心な避難所として公共施設を提供できる環境づくりは急務である。4～5年以内に70%の確率で関東直下型地震発生の予想が出されたばかりだ。